岩波講座 日本文学史 第十三巻 近代

啓蒙期文学

柳田泉

岩波書店

啓蒙期文学

柳田泉

目次

一　序　章……三
前期
二　啓蒙時代……五
三　啓蒙時代の文学……一一
四　新しき文学理想……二〇
後期
五　革新時代……二七
六　革新時代の文学……三六
（その一）　新しき文学……三六
（イ）　翻訳文学……三八
（ロ）　創作文学……四六
（その二）　旧文学の革新―続き物文学……六六
七　結　章――文学改良時代……七四

一　序　章

日本近代の啓蒙的動きは、自然生長的な国内的分子もあるけれども、大半は西洋文明、西洋文化の移入にもとづくもので、それが殊に力づよく特色を示すのが明治維新後のことである。明治維新で政治的に脱皮した日本が、世界の新舞台で早く西洋強国と肩を並べたいという一心から、しゃにむに西洋文明、西洋文化を取り入れて自己教育をやり、自己革新をやって、日本流に西洋強国に近づいていく、それが即ち日本近代の啓蒙的動きの大体である。

その時期はといえば、維新の前、潜在的な長い時間があるが、今それを見ないことにすると、提督ペルリが鎖国日本の門戸を開いた嘉永の末年から明治の初めにかけての約四十年間(試みに西暦をあてると、一八五三年あたりから九七年あたりまで)、そのうち、明治維新から明治二十年ごろまでの約二十年間が、まず啓蒙運動らしい啓蒙運動が殊にあざやかに展開された時期といえよう。その間に、旧日本の封建文化、学術、生活、思想、一切が西洋渡来のそれを基調とした啓蒙文化の洗礼をうけて、ともかく革新され、新日本の面目を打ち出してくる。われ等のいわゆる近代日本の文学も、かくして革新されたものの一つである。

そこで、この文学の革新のことであるが、同じく文学とはいっても、文学の観念も内容も、この啓蒙運動当時と今とは大きにちがうところがある。わかり易くすると、まず当時は大きな文学と小さな文学と二つあったと考えてもらう。小さな方は、狭義の文学で、その時代の文学、今日の文学とあまりちがわぬものであり、これを啓蒙時代の文学(時代文学)と称してよい。大きな文学は、広義の文学で、いわゆる啓蒙文学の本体であり、時代に対してあくまで啓蒙的な役割を果し、いわゆる啓蒙時代の啓蒙的特色を十分発揮した訳書著書のすべてをいう。その中には、あらゆる学術、思想、歴史、地理の書物、一切が入る、いわゆる文学関係の書も勿論入る。そうして二つの文学の関係をいえば、

大きな方は革新する文学で母胎の役、小さな方は革新される文学で、胎児としての生長ということになろう。此の二つの文学の観念は、元来幕府時代の上の文学、下の文学というそれにつながるもので、上の文学とは社会の正面に立つ代表的のもの(漢学、詩文乃至国学)、下の文学とは上の文学をうけて大衆の啓蒙慰楽に当る戯作家の著作をさして来たところを反映している。当時は、西洋の文学観念を基準とした文学観念の分化が勿論十分でなかったから、そういう伝統的な文学観を反映して、今日なら文学の範囲などに入れる人のない政治、経済、法律、科学なども、文章の修飾を借りて書物の形式になっているというだけで文学、大きな意味での文学の範囲に入れられていた。その上、これが以上のように上の文学、即ち社会の正面に立つ代表的なもの、インテリ階級の接触すべき唯一の文学と見られていたので、時代大衆の上に大きな勢力をもっていたのである。従ってこれがその特色を発揮して時代文物一切を啓蒙し革新するにつれ、狭義の文学も革新されることになって、いわば革新文学として新しい面目を示してくることになるのは、自然の勢いであったといえる。

此の広義の啓蒙文学は、実質的には時代の必要から新日本建設の目的で移入された西洋書の翻訳が大半であるが、中にまじる著作も、それら西洋訳書の影響で出来た同精神のものが多かった。だが訳書も著作も一とまとめにしてみると、そのいわゆる啓蒙的特色というのは、どういうものであったか。以上のようなわけで、そのいわゆる啓蒙的云々の淵源が西洋からきたものであることには異存がないが、日本に入った上でのものについてまとめてみると、知的には科学的思想とそれを中心にした合理主義、情的には個人自覚による自由平等思想、行動としては封建的世襲の打破、旧慣迷信の一掃、空理偏重排斥、物的幸福の追求、国民身心の向上など、新日本建設のための一切の努力、後にはそれを一とまとめにしていうところの文明開化の実践となるわけであるが、その悉くが西洋でいう啓蒙文学から来たものとはいえないまでも、啓蒙文学の中心に立つ人間完成の思想が、曲りなりにもこれを貫いていたことは、西洋の啓蒙時代と同じことである。直接入ってきたのは、第十九世紀の一般西洋文化(思想文学、その他)としてであるが、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

この十九世紀の西洋文化なるものがもともと啓蒙時代から濾過され、進化強化純化されてきたものである一方、それが日本の国家的、社会的にもまだ封建時代をぬけきっていないところに入ったのであるから、一般的な文化といっても、その啓蒙的役割がつよくきいた。この啓蒙がそのまま革新の役割もひきうけて啓蒙革新が殆んど同時に併行されるのもそのためとみてよかろう。

こうして大きな文学から啓蒙され革新されて、われ等のいう文学は革新文学となっていくのであるが、その啓蒙革新の過程を語るとなると、何としても二つの文学の関係を必然的なものとみていくのは、当然だと思う。以下、そういうわけで、大きな啓蒙文学と、それにつつまれた啓蒙時代の文学とを交互にからんで語ることにするが、前後二十年を一気に語るのは無理であるから、明治十年を境に前期と後期にわけ、その前を啓蒙時代とよび、その後を革新時代とよぶことにしよう。即ち前は、啓蒙文学プロパアの時期、後は、勿論啓蒙もつづくが、それと同時にその刺戟で出来た革新文学のめだつ時期だからという意味である。

前期

二　啓蒙時代

以上のように、大きな啓蒙文学を前後にわけて通覧すると、前期の分は啓蒙物が圧倒的に多く、文学的分子は極めて少なく、文学重視の風も殆んど見えない。その反対に後期の分は、啓蒙物も多いことは多いが、文学的分子が漸く増加し、文学重視の風がはっきりしており、文学的理解も大に進んでいるのがわかる。それで、啓蒙文学と時代文学との関係が、前後では多少ちがうものがある。即ち啓蒙文学から時代文学への影響のしかたが、前期には間接といっ

てよく、後期は直接で且つ必然的といってよい。前期では、啓蒙文学からまず啓蒙的な空気なり思想なりが出来、時代社会の万般を動かして、さてそれが時代文学の精神に影響するのであるが、後期では勿論それもあるけれども、そのほかに啓蒙文学中の文学的分子、殊にそこから生れた翻訳文学なるものが直接に時代文学に影響して、旧文学を革新し、新文学をつくり出すということになる。いささか強調した気味があるが、啓蒙文学と時代文学の影響との間には、前後期でこういう差があることを知っていただきたい。啓蒙文学の大勢一般について、これだけのみこんでいただいてから、前期の啓蒙時代、即ち啓蒙文学プロパアを語ることにしよう。

さて西洋文化、思想、学術、そういうものを日本に入れた書物を啓蒙文学と見る立場からすると、そういう書物は、私のいわゆる啓蒙時代よりずっと古くから始まるのであるが(たとえば新井白石の「采覧異言」「西洋紀聞」、森島中良の「紅毛雑話」「万国新話」の如き)、今は便宜上、古い方は一切略して、福沢諭吉、柳河春三(三をゾウとよむのはいけない)あたりから始める。ただ明治以前の古いころ出たいろいろな訳著にも、歴史、地理、風俗、伝記など、幾分文学めくもののあったことだけはいって置く。ところでこの種のおびただしい訳著の中、便宜上著作の方からあげると、何といっても福沢が第一で、彼の全著作が啓蒙文学という位のものである。またその著作の空気からいっても、当時としては極めて文学に近いものをもっていた。煩をいとうので一々刊年をあげることは略すが、有名なものをひろうと、「西洋事情」「西洋旅案内」「学問のすゝめ」「窮理図解」「世界国尽」「文字之教」「文明論之概略」「学者安心論」などたくさんある。柳河春三の「万国新話」、黒田行元の「西洋事情」も、栗本鋤雲の「鉛筆紀聞」も、福沢のものほど有名ではないが、啓蒙の力はつよかった。それから瓜生政和の通俗書、「西洋新書」「西洋見聞図解」「万国百物語」「和洋合才袋」「知識初歩」なども、今は忘れられてはいるが、注意されてよい。殊に文学に近いという点では、なおそうである。橋爪貫一(瓜生と同人ともいう)の「開知新論」、村田文夫の「西洋聞見録」、鳥山啓の「西洋雑誌」、それから加藤祐一「文明開化」、同「開化進歩の目的」、小川為治「開化問答」、藤井三郎「啓蒙雑記」などの雑著が後から後へと

つづく。紀行もまた西洋での実見実聞を記録したものとして有力な啓蒙書となっているが、渋沢栄一達の「航西日記」、中江弘(桜洲)の「漫游紀程」「西洋紀行航海新説」、栗本鋤雲の「暁窓追録」、古川正雄の「洋行漫筆」、成島柳北の「航西日乗」など、面白いものがたくさんある。中井、成島のものには詩歌が入っているので、一層文学的になっているといえよう。大部のものには「米欧回覧実記」その他があるが、これ等も勿論啓蒙の役割は果したろう。政治に関したものとしては、宇喜多小十郎「民権夜話」、竹中邦香「民権大意」、福沢諭吉「通俗民権論」、その他がある。思想的、学問的なものとしては、西周(にしあまね)「百学連環」、同「百一新論」、宇田健斎「学的論」、津田真道「如是我観」、佐田白茅の「極論開化」などをあげてよいが(杉田玄白の「蘭学事始」もこれ等に入れよう)、殊に「百学連環」は、当時は成書となっていなかったけれども、講義として多数者の耳に入ったもので、文学思想の方では極めて貴重な初期啓蒙的著作である。

日本人の著作は以上でとどめ、次に西洋書の訳述物をあげよう(大よそ明治十年まで)。これは、実に各種各様にわたって文字通りおびただしいものであり、それだけにとても半分どころか何分の一もあげられないので、まず主要なもの何十分の一という数で満足を願うより仕方がない。この方は真面目な、実践的な、学問的なものと、全く啓蒙的な意図からなされた一般的なものとに大別されるが、そのどちらもたくさんある。前者からあげると(原著者の名は特別なもののほかは略する)、歴史伝記では「西洋史記」(村上英俊訳)「西洋易知録(せいよういちろく)」(河津祐之訳)「西史摩要(せいしらんよう)」(福地桜痴)「万国通史」「西洋開化史」(ともに作楽戸痴鶯(さくらどもおう)訳、福池桜痴の匿名ともいう)「欧羅巴文明史」(ギゾオ、永峰秀樹訳と宝田充美訳とある)「英国開化史」(バクル、大島貞益訳、後に土居光華訳もある)「英史」(大島貞益訳)「仏国史略」(田中耕造訳)「仏国革命史」(ミニュー、河津祐之訳)「希臘史略」(楯岡良知訳)「羅馬史略」(大槻文彦訳)「魯国新史」(小野寺魯一訳)「合衆国小史」(桑田親五訳)、その他各国史いろいろ(この間から田口卯吉「日本開化小史」の如き名著が出た)、伝記物には「西洋英傑伝」「拿破崙(ナポレオン)詳伝」(曾谷言成(そたに)訳)「拿破崙第一世伝」(陸軍省訳)「仏帝三世那破烈伝」(尾崎三郎訳)「比斯馬留克(ビスマルク)伝」

（長田銓太郎訳）「西国童子鑑」（中村敬宇訳）その他多数、戦記にも「法普戦争志略」（渡三之助著）などがある。これは戦争実験記であって、それだけ貴重でも面白くもある（有名な王紫詮の「法普戦記」とは違う）。地理書も沢山あるが、これはまず内田正雄訳編の文化地理書「輿地志略」で代表させたい。売行が福沢物にまけなかったというだけでも、その人気と啓蒙力がわかる。丹羽純一郎訳の「竜動繁昌記」（ジョン・マーレー）は別の意味で流行書の一つであった。政治経済法律関係では、まず政治で、「自由之理」（ミル、中村敬宇訳）「民約論」（ルソオ、服部徳訳、後に中江兆民訳の「民約訳解」が出た）「自由新論」（高橋達郎訳）「共和政治」（中村敬宇訳）「政治略原」（何礼之訳）「国法汎論」（ブルンチュリ、加藤弘之訳、加藤にはこの外に著述として「隣艸」「立憲政体略」「真政大意」などの啓蒙的名著があった）「英政如何」（鈴木唯一訳）「英国政事概論」（安川繁成訳）「代議政体」（ミル、永峰秀樹訳）「代議政体論」（スペンサア、鈴木義宗訳）「権理提綱」（スペンサア、尾崎行雄訳）「自由自治」（リーバア、加藤弘之重訳）「立憲政体起立史」（加藤弘之訳）など、それから法律で、「万法精理」（モンテスキュー、何礼之訳）「立法論綱」（ベンサム、島田三郎訳）「泰西国法論」（ヒッセリング、津田真道訳）「性法略」（神田孝平訳）「法律原論」（島田三郎訳）「上木自由論」（トクビル、小幡篤次郎訳、出版自由論）「万国公法蠡管」（丁韙良訳、高谷竜洲注）、明治前のものながら国学者野野口隆正の「新真公法論」は思想的なものとして見れば面白い。経済関係では「人口論要略」（マルサス、大島貞益訳）「経済論」（ミル、鈴木重孝訳）「経済小学」（神田孝平訳）「経済原論」（箕作麟祥・緒方儀一訳）「交易通史」（杉亨二訳）「大英商業史」（田口卯吉訳）など、これは多くてあげきれない。福沢の「帳合之法」、福地の「会社弁」なども新しい興味をもたれたろう。福沢著の「経済全書」が完成しなかったのは惜しい。哲学思想に関したものでは、「致知啓蒙」（西周訳）「人心論」（川本清一訳）「思想之法」（トムソン、鈴木唯一訳）「男女同権論」（ミル、深間内基訳）「道理之世」（深間内基訳）「利学」（ミル、西周訳）「文明論女大学」（ミルによる批評、土居光華訳）、修身修養道徳関係のものでは（従来の日本の学問はこの種のものが大部分であったので、この方の西洋書も大に力を入れて紹介された）、「西国立志編」（スマイルズ、中村敬宇訳）「西洋品行論」（同）「勧善訓蒙」（箕作麟祥訳）「泰西修身論」（ウェーランド、山本

俊義訳）「修身訓蒙」（同）「交際論」（高橋達郎訳）、教育と銘うったものもいろいろあるが、「教導説」（箕作麟祥訳）「彼日氏教育論」（蘭人ファン・カステール訳）「小学教育論」（ノルゼント、小泉信吉訳）などで略すとしよう。それからはっきり宗教となると、旧新約聖書の訳はまだそろわぬにしても、その出たものは啓蒙にひと役買ってはいた。「天道溯源」（カラザルス、中村敬宇訳）「宗教三論」（ミル、小幡篤次郎訳）などは是非あげるべきものであろうが、漢学家安井息軒の「弁妄」は反対の意味で大きな啓蒙的勢力となったろう。最後の科学関係、これは範囲もひろく、数も多いけれども、「天変地異」（小幡篤次郎訳）「星学図説」（神田孝平訳）「博物新編」（同）「理化新編」（ハラタマ訳）「理学新論」（藤田正方訳）「理学啓蒙」（片山淳吉訳）「格物入門和解」（丁韙良訳）「格物全書」（小宮山弘道訳）「窮理問答」（後藤達三訳）「窮理日新発明紀事」（東井潔全訳）「物理日記」（大阪理学所訳）「奇機新話」（麻生蒯吉訳）「機械事始」（田代義知訳）「電気論」（中神保訳）「越歴新論」（明石・加賀・横地訳）「理学」（中川重麗訳）などで代表させよう。医学、生理、植物、さては工学、農学などの啓蒙書もいろいろあるが、そう諸学にまで及んでは大変であるから、これはここで打ちきるとしよう。次に訳書中啓蒙的な意図でなされた一般的なものを見本的にあげると、「西洋夜話」（寧静学人石川彝訳）「世界智計談」（村田尚志訳）「世界奇談」（久保扶桑訳）「世界七不思議」（青木輔清訳）「東西世説」（中川将行訳）「西洋蒙求」（渡部一郎訳）などがあろう。この方は、前者よりも私どものいう文学に幾らか近いが、前者の中でも、歴史、伝記のほか、「西国立志編」「西洋品行論」「勧善訓蒙」「輿地誌略」「自由之理」「万法精理」「民約論」「利学」「道理之世」などは、同じく皆幾らか文学くさいものとなっていたものである。

では、この時代、これ等の啓蒙訳書の中に入って、本式に文学と見られたものにどういうものがあったか。それは実に乏しいといわざるを得ない。「魯敏孫全伝」（デフォー、斎藤了庵実は黒田行元訳、小説でなく実事と見ているのが注意される）「通俗伊蘇普物語」（渡部温訳）「開化進歩後世夢物語」（上条信次訳、第二十一世紀の世界未来記）「孝子流別奇談」（小林謙吉訳、人情的教訓物）「開巻驚奇・暴夜物語」（永峰秀樹訳）「西稗雑纂」（中村敬宇訳著）、これに明治以前に訳された

「和蘭美政録」(神田孝平訳、原本はクリストマイエル氏「死刑彙纂」楊牙児奇獄(ヨンゲルきごく)、青騎兵一件の二話を含む)、漢詩形式で訳された西洋詩歌の少々(たとえば中村敬宇訳の「僻村牧師歌」「打鉄匠歌」など)を加えると、これで殆んどその全部である。外に筋書や梗概めくものが多少あるが、数としてはいうに足りない。洋行者達が早く彼の地の流行文学に接していた(たとえば福地桜痴がユーゴオの「ミゼラブル」に接し、西園寺公望がゾラ文学を読んだ如き)という事実もある。また大部分は幕府所蔵書を移管したものという静岡図書館の貴重図書の目録をみると、私どもが案外と考えるほど沢山に文学関係の書物が入っていたのであるから、読んだ人々も相当多かったにちがいないのであるが、その翻訳紹介されたものがこう少ないのはどういうわけであろうか。それは蓋し第一に時代の要求が文学よりも急なものの多かったことによるのであろうが、同時に当時の人々の文学への理解の少なかったことと、そこから来る文学軽視も原因となっているにちがいない。上下文学の隔絶ということも、その一因となっていよう。ともあれ、翻訳はこう少なく、動機も好奇的で文学革新の気もちはそう見えなかったが、翻訳された以外の西洋文学がインテリ人に与えた影響の方は、ずっと大きかったと考えてよい。

以上がいわゆる啓蒙思想の主な母胎となった著訳書であるが、然しその母胎はこれだけに止まっていたのではない、それを中心につつんで、もう幾廻りも大きな新聞雑誌の文章というものがある。これもまた大半は西洋文化、思想、学術を背景にして日本上下の啓蒙化を目ざしていたのである。その影響力も大きかった(福沢の『民間雑誌』、小野梓の『共存同衆』、成島柳北の『朝野』、福地の『東京日々』、諸学者の『明六雑誌』『洋々社談』『如蘭社話』などの論説記事を例にとっても、思い半ばにすぎるものがあろう)。

以上の書物文章から生れた啓蒙と革新の思想なり空気乃至精神なりは、明らかに一つの方向をもっていた。それは、何を目指していたかというと、一言でいえば文明開化である。つまり日本を早急に文明開化の域に引き上げたいということである。今のままだと、日本は新世界の敗者となるより仕方がない。日本はよろしく封建日本の生き方を我か

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

らすて、旧日本の一切をふりきって、新しく真の世界(今までの東洋の一隅だけでない)に生きかえらなくてはならぬ。そのためには西洋を文明の先進国とし、そこから知慧も技術も経験も思想も一切をかりなくてはならぬ。これを一言でいうと文明開化に向うという。言葉をかえると、日本は此の更生のため、西洋の啓蒙と革新を理想として、西洋と同程度の人知の発達、生活の水準、諸制度の整備、国家富強の度合、個人自由の身分といったものを能う限り早急につかむ必要がある。この時代の一切をつつんだ啓蒙と革新の動きは、そこから出て、それをなるべく早い将来に実現しようと目ざしつつあったのである。この空気が時代の一切を支配した(文学をもふくめて)。

三　啓蒙時代の文学

此のころの文学、即ちいわゆる戯作文学は、前にいったように、当時は下の文学と軽く見られていたが、読書社会における実勢力は決して小さいものではなかった。それはいわゆる小説(スケッチ乃至小品の類も入る)を主にしたもので、今日の文学概念のように、詩歌、戯曲、批評と並んで文学を成り立たしているといったものではない。詩歌は文章(主に漢文)とともに上の文学であるが、戯作はその下に立ち、浄瑠璃、院本は上演を主にした伎芸で、まだ文学の概念には入っていなかった。然し読者の層は案外広くも深くもあったと見える。この戯作は、以上の啓蒙運動の始まったころは、読本(よみほん)、滑稽本、人情本、草双紙という四形式に分れ、それぞれの伝統なり読者層なり創作理想なりをもっていたが、ざっというと、読本、草双紙は歴史風で空想的理想主義的なもの、滑稽本と人情本は世話的現代的(少くとも実質的には)で、写実的手法をつかったもの、そのいずれにも勧懲主義が作者の態度に或は濃く或は淡く出ていないことはなく、すでに思想的には上の文学に強く押えられており、そのために一部のものは寓意諷刺などに不平をもらしていることもある。勧懲とはいっても、単に封建道徳(乃至それに準じての町人道徳)の強化というのであって、

人生の真実を正面から描いてそこから正しい教訓をくみとらせるなどというのではない。寓意諷刺の作物には、多少そこにふれたものもあるが、然しそのふれたことをそのまま示さず、自嘲的な笑いでそれをつつみかくしている。概していって代表的なものは、知性も独自の思想もない、感情的空想的技巧的な架空物語で、筋の上でも文章でも誇張か虚構かが非常に多く、一方は美しく、悲しい、又は残忍非道な方に誇張すれば、他方は猥褻不倫不道徳の方にわざとらしく奔るといったところがある。ともに読者に迎合して、自然と真実を欠いた作為の物語である。読者層からいえば、上の文学に近い読本は武家や町人の知識階級、典型的な下の文学である滑稽本人情本は町人の道楽連、草双紙は女性子供達ということに一応はなっていたが、必ずしもその通りではなく、上の文学の読者にも又一般の男性にも草双紙の愛好者が少くなかったらしい。それで四形式の戯作中、当時としては草双紙の勢力が一番大きく、滑稽本のそれがこれにつぎ、人情本、読本のそれはかなり劣ったものであった。

この四形式の戯作の作者は、馬琴の死後、これというほどの天才も出ていなかったが、このころともかく世に名を知られた連中はといえばかなり多かった。然し大抵は明治維新の大きな波に洗われて、いわゆる啓蒙時代まで残ったのは幾ばくもない。その残った人々は、為永春水(二世)、柳水亭種清、山々亭有人、万亭応賀、仮名垣魯文、篠田仙果、梅亭金鶴などである。維新後にこの道に入った人としては、松村春輔、高畠藍泉などが数えられる。

明治維新の後、啓蒙時代に入ってからの戯作界の大勢はどうであったか。作品の数からいえばさすがに草双紙が大半以上を占めていたが、然し新作のものは少く、目立ったものは、皆幕末からの引きつづきものである。「八犬伝犬の双紙」「童謡妙々車」「薄俤幻日記」「筆海四国聞書」「室町源氏胡蝶巻」「七不思議葛飾譚」「新局九尾伝」「北雪美談時代鏡」「釈迦八相倭文庫」「厚化粧万年島田」「黄金水大尽盃」「明鴉墨絵迺裲襠」「白縫物語」などがそれであるが、内容は惰力的模倣的で、殆んど何の新味もない、例によって勧善懲悪、善玉に悪玉、勇士美人、仇討に宝物探し、神助妖術などをあしらったもの、創作というより講談や演劇脚本の筋書をかりた方が多く、ただ美しい文章の味でやっ

と読ませているだけであった。それでも「時代鏡」(春水)や、「白縫物語」(種清)「倭文庫」(応賀)などが若干の人気をもっていたことはいたのである。滑稽本の方は魯文と金鶯を代表とみてよく、ともに過去における代表作「滑稽富士詣」(魯文)「妙竹林話七偏人」(金鶯)の余勢を負うてはいたが、明治に入ってからは、この方は魯文の一人舞台となった。人情本は山々亭有人のほか、やはり金鶯が代表の一人になるが、これがずっと後恋愛小説と姿をかえて復活するまでは、わずかに命脈をつないだというところ、読本は急に衰えて一時ふっつり勢いが止まったかと思われたけれども、ひとり「神稲水滸伝」(岳亭定岡―知足館松旭)だけはこの方の興味をとどめて、明治新文学の確立までつながることはつながった(逍遙、露伴、水蔭、不知庵、鏡花、荷風など、若いときにはこれを面白く読んだものであった)。これも、あとで又別の理由で復活の運命に出会うのである。

普通は啓蒙時代の代表戯作家というと、すぐ仮名垣魯文といわれるが、それは明治に入って五六年を経てからのことで、維新直後は、魯文の位地はまだそれほどでなく、為永春水、山々亭有人、万亭応賀などの方が重く見られていた。それは、戯作家としての先輩後輩とか、作家的才能の多少とかからだけではなく、主として社会的身分の上下によったものであった。春水は歴々の武家、有人は大商人の番頭、応賀は富裕町家の若旦那なのに、魯文は丁稚上りのかけ出し作者であったからである。然し事実上、この三人は、戯作の方での先輩でもあった。

此の三人の中、一番創作の才があったのは、恐らく山々亭有人(天保三年―明治三四年 一八三二―一九〇一)であったらしい。有人は本名を条野伝平といい(伝兵衛ともある)別に採菊散人(さいぎくさんじん)と号した。彼は明治の前には主として人情本の作者として知られ、「春色江戸紫」「花暦封じ文」などを書いたが、明治に入ってからは草双紙に転じ、新作品を次々と公けにした。「柳蔭月朝妻」「今朝春三組盃(けさのはるみつくみさかずき)」「菊文様皿山奇談」「仮名読太閤記」「阿玉ヶ池月櫛形」「いろは節要」などがそれである(これ等の中で、刊年上初版か再版かの問題の伴うところもあるが、今は皆明治期の刊行として置く)。それから「近世紀聞」の案を立てて読本復興のきっかけをつくった。訳と銘うった「和洋奇人伝」も、その才の機敏さを語っているかと思う。然し

時代の動きに感じて、戯作の方に見切りをつけ、早く新聞の方に眼を向けて、同志とともに『東京日々新聞』を創刊した(明治五年)。こうして戯作界の足を洗って十幾年の後(同十九年)、『やまと新聞』が新に出たのを機に、彼はわけあって再び新聞小説界に登場するのであるが、その筆になったものは、大半西洋の古典や面白い通俗小説の翻案であったところに、その文学の特色があった。このころは専ら採菊散人の号を使ったが、これが当年の山々亭有人だということを知らぬ読者も多かった。作風も文章も、それほど著しく前とは変っていたのである。

三人中、最も作家らしい風格を示していたのは為永春水(文政六年—明治一九年 一八二三—一八八六)であろう(春水とはいっても二代である)。戯作好きから初代の弟子となって、作者仲間に入ったが、それでも出身の武家という品格を崩さなかった。染崎久兵衛延房というのがその本名で、対馬の宗氏の藩中ではかなり重い身分であった。天保年代から戯作界に頭を出し、明治以前に於いて人情本、草双紙方面での第一人者となっていた。人情本の代表的なものは「いろは文庫」(初めの方は初代の名で出た)、「婦女八賢誌」であるが、草双紙は殊に多く、明治以前で名のあったもの(「時代鏡」「新局九尾伝」「仮名読八犬伝」など)は大抵その手に成った。内容の独創は少ないが、文章に艶があって、上品な美しさをもち、それに若い美男美女を活躍させるので、人気が高かった。

時代が明治に入ると、武家出身(このころは実質上、今日でいうインテリ階級に当るのが多い)だけに、時勢の変りへの悩みも多く、遊楽的な戯作生活への反省も強かった。半生の戯作者生活を後悔した述懐の語も伝わっている。それで初めは旧来の惰勢で草双紙をつづけていたのをやめ(前にあげた「幻日記」「万年島田」など)、新時代に調子を合わせるつもりで滑稽本(「東京開化膝栗毛」など)を試みたが、長いこと艶ぽい人情物とロマンチックな空想文学でやってきたのであるから、時世のうがちは魯文のように軽快にはいかない。そこでそれも間もなくやめて、読本、実録物に向ったが、その「近世紀聞」(明治六—十四年、初めは条野伝平共著)は成功した。そのほか「浪華史略」「台湾外記」などがあるが、これ等は「近世紀聞」ほど成功しなかった。生活に窮した揚句、古本屋にもなったというが、明治八

九年ごろ『東京絵入新聞』に関係して、続き物記者となったので、復活し、そこを動かず没年まで書きつづけた。その十年以後のことは又後に語ろう。

万亭応賀（文政元年―明治二三年一八一八―一八九〇）は本名服部孝三郎（又長三郎とも）、維新前から「倭文庫」の作者として名があったが（勿論この他に十種にあまる草双紙その他の作はあった）、元来は富家の若旦那として苦労知らずに生長し、戯作はその余技であった。道楽がすぎて家をつぶしてから、余儀なくこの道で生活することになったが、然しその旦那気分はとれず、人がよく、見栄がつよく、それでいて生活力はなかった。そういう応賀に明治維新の大きな変動は正に致命傷で、彼は如何に生きて行くべきか方途を失ったといってよい。だが維新後の応賀を語る前に、魯文の活動を語った方が都合がよいので、まず魯文を語ってから、そのあとで応賀を片づけよう。

仮名垣魯文（文政一二年―明治二七年一八二九―一八九四）、初め野崎文蔵といったが、明治後は、仮名垣魯文を姓名とした。彼は天性のオッポチュニストともいわれ、又そう生きたが、この頃の戯作界では第一の奇才ではあった。時々無学無識をそしられはしたが、頓智頓才、当意即妙の作風は比類のないものであった。戯作が好きで此の道に入ったことは、前の三人と同じことであるが、前の三人のように身分も富もない彼は、戯作即生活であり、始めから戯作で生きた。従って生活の興味はそのまま戯作、戯作の興味はそのまま生活のそれであった。身分も何もない彼は、書いて生きなくてはならぬ。それで維新前、大に生きるに苦んだが、その代り維新となっても、他の戯作者のように何も損するものがなかった。いな、却って新旧過渡の時代に立ってみて、損するどころか大に得をした。即ち時代の動きそのものに彼は限りのない戯作材料を見出したのである。彼は気軽に、何の未練もなく過去の自分をすてて、啓蒙と革新の世界に我からとび込んだ。そうしてその世界の流すままに楽々と流されて、そこで見た限りのものを戯作に書いてわが生活とし、本来の才能をのばすとともに人気もあげたのである。

戯作界の大勢が草双紙であったから、彼も維新前からその方をかなり沢山書いたが、別に当り作というほどのもの

もない（そのほか生活の必要から切附本とか、説教、祭文、ちょぼくれの本文めくものとか何でも書いた）、その才能からいっても生立ちからいっても、彼は滑稽本系統の人で、それだけに「滑稽富士詣」（万延元年）にも成功したのである。趣向は一九を学んでいるが、自分の眼で見た新しい材料をつかった。

維新後も一応は旧来の惰勢で草双紙をつづけたが（「薄緑娘白浪」「松飾徳若譚」など）、それよりも得意の滑稽本とパロディ文学とで、精一杯の時世描写をやってみせた。それがうまく当ったので、彼は他の戯作者達が生活にあえいでいるのと反対に、相当な魯文ブームを味わった。それ等の作物には、「西洋道中膝栗毛」「牛店雑談安愚楽鍋」「河童相伝胡瓜遣」「大洋新話蛸之入道魚説教」「万客対話傾語箋」（未見）「百家各物、西洋器会」（刊年未詳）などであり、中で「膝栗毛」と「安愚楽鍋」は特に有名であった。「膝栗毛」は趣向は古いが、そこには封建世界の夢の中からいきなり世界文明の大舞台に引き出された日本人のとまどいした姿が自嘲的に新しく描かれている。「安愚楽鍋」は、啓蒙と革新にうら返しにされてゆく当時の社会に吃驚しながらも、性根をすえて新しく生きていこうという日本庶民の心意気が写されている。パロディとして典型的なものは、「倡妓評判記」中の「苦海文づくし」（福沢の「世界国尽」のもじり、別にこれの模倣として「世界都路」を書いた）、「胡瓜遣」（同じく福沢の「窮理図解」をもじったもの）、などであるが、パロディは書いても、時代の啓蒙と革新には賛成ではあったから、政府の施策に協力もした。その例は「魚説教」のほか、「三則教の捷径」などに見られる。これは明治五年（一八七二）教部省の発布した三条の教則（敬神愛国、天理人道、皇上奉戴）の普及俗解をめざしたものである。彼はこのとき、条野伝平と二人、戯作者を代表して「書上げ」をして協力を誓った上、一時は自身で教導職にもなった。新日本の方向がほぼきまり、社会変動の大波が次第に落ちついて啓蒙と革新が本式になるとともに、戯作の筆をやめ、新聞記者に転じた。そうして時世の求めに応じて佐賀、熊本など騒動物の実記実録ものも書いた。彼はその頃から、いわゆる「上」の文学者らしい態度をとり、文章もそれにふさわしい漢語交りの生硬な書生くさいものを書き始めて、従来の、諷刺と皮肉にみち、穿ちを得意と

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com